実践レポート

「やさいをそだてよう－パート２－
育ちを実感し、感謝の心を育む「親子手帳」の取組」

三豊市立詫間小学校
教諭　　森　理津子

１　はじめに

本校は、食に関する指導の一環で、食活動に関わる人やものに感謝する心を持つことを大切に実践を積み上げてきた。植物にかかわり、指導していただいた人に感謝するだけでなく、気付きをくれたものに、いのちを与えてくれたものに感謝する気持ちを高めたいからである。

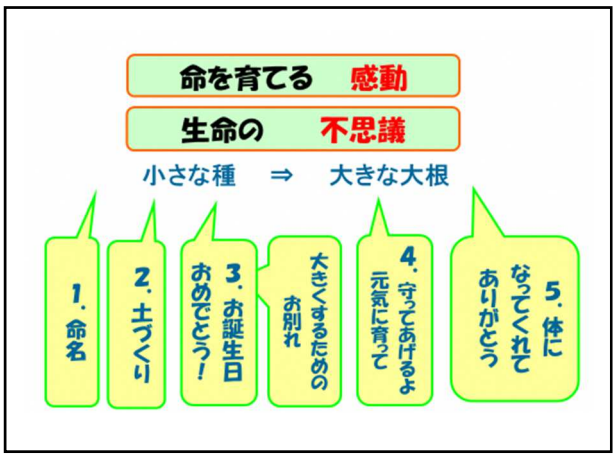
２年生の児童たちは夏野菜の栽培（パート１）で、日々の成長や変化から命の営みを実感しつつも、枯れたり病気になったりして消えていく命も同時に見てきた。調べ学習で原因や対処法を見つけたが、結局は大人の力を借り、助けてもらった。この失敗を生かして、次こそ自分の力で収穫したいという思いを持っている。

これらを踏まえて、大根の栽培（パート２）では、小さな種から育てる事で野菜の生命の不思議さと大きく育つ感動を感じ取らせたいと考えた。ここで生長を記すものが単なる「観察記録」ではなく「親子手帳」にしたのは、自分や友だちの命が大切に育てられたように、植物もまた自分の子どものように、責任と愛情を持って大切に育てて欲しいという願いからである。

２　実践の内容・方法

（１）かかわりの節目をとらえた思いの表出

子どもたちの思いは、変化を捉えたかかわりの質が転換する時に表出させることが重要である。そこで、種に出会う**≪命名≫**、成長を左右する**≪土づくり≫**、発芽の喜びと間引きを経験する**≪お誕生日おめでとう！≫**　**≪大きくするための、お別れ≫**、大きくするための世話を知る**≪守ってあげるよ・元気に育って≫**、収穫を喜ぶ**≪体になってくれて、ありがとう≫**を大きな節目として位置づけた。以下に、節目ごとの子どもの活動や思いを示す。



【感動をより大きくする、生長の５つの節目】

【願いを込めた命名とイメージ図】

≪命名≫

「命」を意識させるために、まず自分の育てる大根に願いを込めた名前をつける。「でっかいちゃん」「あまあま大根くん」等、こんな風に育つといいなと思いをめぐらせ、親子手帳の表紙に名前を書いた。この時から親（自分）としての立場が成立し、子ども（大根）となる大根を育てる心構えができる。

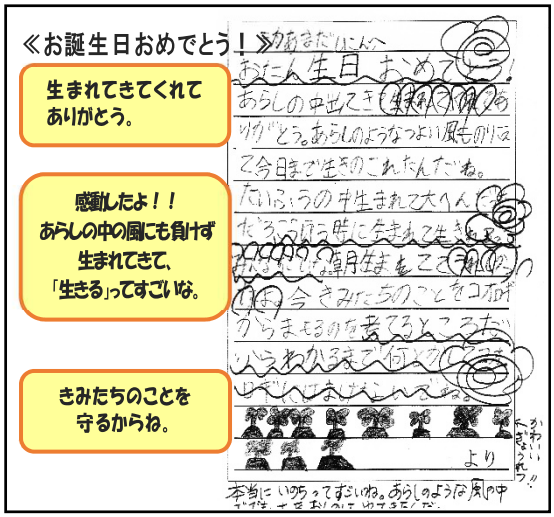
≪土づくり≫

夏野菜の時には校務技師さんにお任せだった土づくりや畝づくりも、児童たちで作業した。「石にぶつかったら痛いから」と石を何百個と取り除き、３０センチ以上もある畝をこしらえた。「ふわふわベッドだから、伸びても大丈夫だよ。」と声を掛けながら、小さな種を一粒ずつ植えた。親子手帳には作業の様子と共に、小さな種に「安心して出ておいで。」と呼びかける言葉が書かれた。

【土づくりの様子】

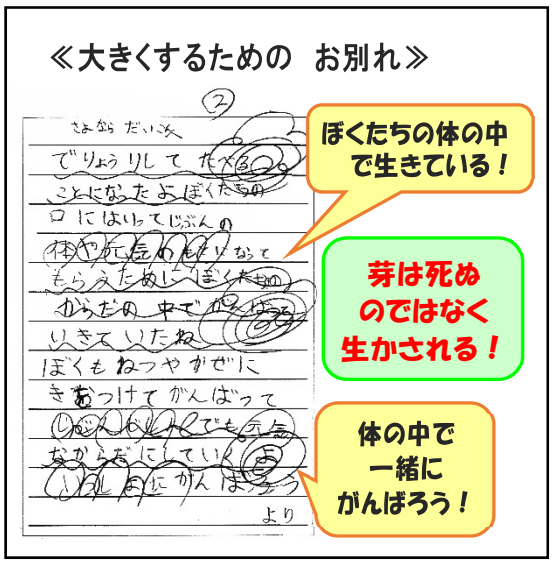
≪お誕生日おめでとう！≫　≪大きくするための、お別れ≫

一斉に芽が出た時も大喜びで「お誕生日おめでとう！」とお祝いした。大荒れの天気の翌朝だったので、「寒かったでしょ。」「応援できなくてごめんね。」など、小さな芽を心配すると同時に、その強い生命力に感動していた。しかし、芽が出たからといってすぐに親子手帳に書くことはできない。自分（親）の大根（子ども）一本を決めなければならない。間引きである。夏野菜の芽かきとは違い、種から育った芽を抜いてしまうことは、児童たちにとってとても重大な事でショックを受けていた。考えを出しているうちに、泣き出してしまう子も見られた。間引かないという選択をした子もいるが、生長するにつれ命名したような大根に育てるためには、欠かせない行為だと気付く。



【発芽した日に書かれた 親子手帳より】

間引いた芽をどうするか考えを出し合いクラゲチャートを活用してまとめた。全てが「命を無駄にしたくない」という気持ちのもとに出た意見であることを称賛した。そして、無駄なく調理して頂くことで、この小さな芽は死ぬのではなく生かされるのだと気付くことができた。

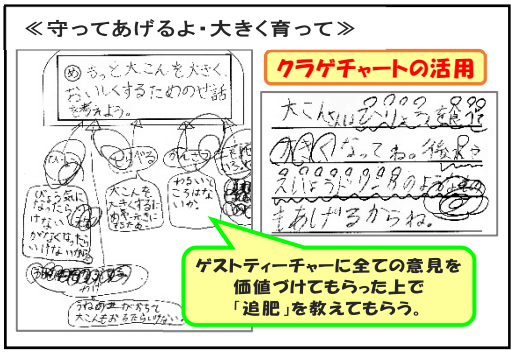


【間引き菜を食べた日に書かれた親子手帳より】

≪守ってあげるよ・元気に育って≫

夏野菜と違って、土の中の生長は見え

ないだけに心配や期待が大きくなっていったようだ。そこで水槽に種まきをしておき、根の生長が見えるように工夫した。そして、今は糸のような根を育てる大切さを感じさせた。その後、ＪＡ職員さんから専門的な知識を教わり、自分たちがミルクだけでは育って行かないように、大根も水だけでなく追肥が必要だと知った。

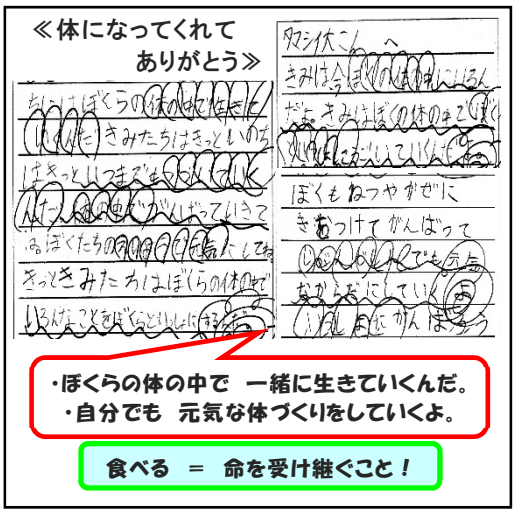


【クラゲチャートで意見を出し合う】

≪体になってくれて、ありがとう≫

いよいよ収穫の時。例年ならば校内でおでん作りをして食べるのだが、自分で育てた大根を家の人に見せたいという。親子手帳を通じて家庭と交流してきたことで、自分だけの大根ではなくなっていた。一緒に大根の生長を案じてくれていた家族にも見せてから、食べることを選んだ。

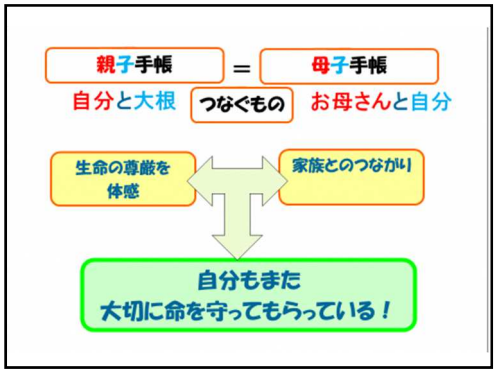
子どものように育ててきた大根を食べることに抵抗はないのかと考えたが、間引きした芽を料理して無駄なく食べたことから学んでいた。全ての食材には命がある。たくさんの人の苦労や努力がある。「食べる」ということは、命を受け継ぐことである。



【大根の親（自分）から子ども（大根）へメッセージ】

（２）育ちを実感する親子手帳の実践

「母子手帳」を見ると、我が子の成長や健康状態、様子が振り返れるように「親子手帳」もまた、自分と大根をつなぐものであって欲しいと考えた。大根を自分の子どものように大切に育むことで、生命の尊厳を体感させるのである。その親子手帳を家庭に持ち帰り、親からメッセージを書いてもらった。ここで、また親子手帳の意味が出てくる。情報が双方向に行き来する。「大きく元気に育つように、僕が守ってあげるからね。」と書かれた横に「○○ちゃんが、みんなから大事に育てられたように、大根さんも育ててあげてね。」といったメッセージが多く書かれていた。家庭の中でも大根についての話が弾み、興味を持続できたようだ。自分が親の立場になったからこそ、自分が無二の存在であること、大切に命が守られてきたことを感じられる時でもあった。

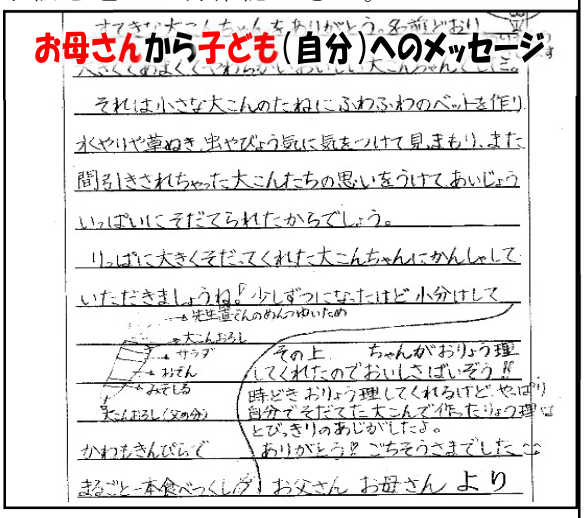


【育ちを実感する親子手帳の実践】

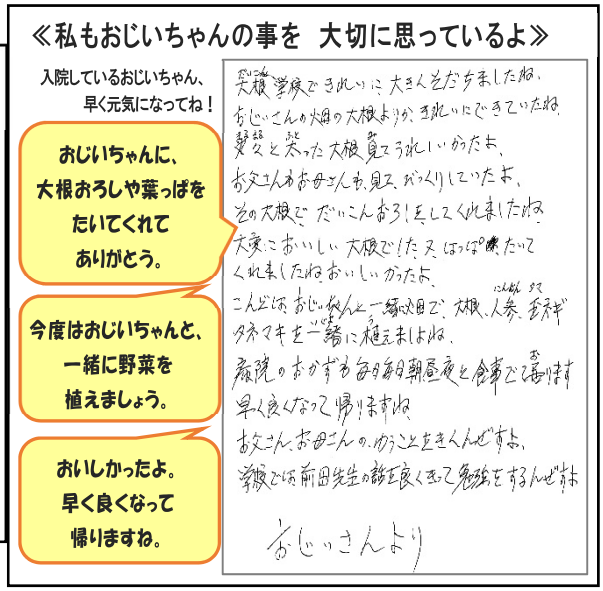
親子手帳の最後のページには、大根を食べた感想がそれぞれに書かれている。「今、大根さんは僕の体になって働いてくれています。ありがとう。」親子手帳に書いてきた様々な思いが全て大根につまっているからこそ、体の中に入ってきたことを実感できたのだろう。観察記録のみにとどまっていたら、ここまでの感情は湧かなかったはずである。親のような思いで命を育んだ実感があるからこそ、命の恩恵を受けた喜びを感じられたのだと思う。

3　実践の成果

母子手帳ならぬ親子手帳は「大根（子）・自分（親）・親」をつなぐ有効な手段となった。例えば心配な気持ちを書いても、家庭に持ち帰ると家族からの励ましをもらえる。家庭内で、育っていく大根の話をすると一緒に喜んでくれる。中には大きく育つためのアドバイスをくれる方もみられた。会話や、親子手帳のやり取りを通じ、大根づくりは家庭の中でも共通の話題となった。そして、自分は大切にされてきたのだと親子手帳を通じて再確認できた。



【親から大根の親（自分）へのメッセージ】



【おじいちゃんからのお返事メッセージ】

すると、児童の行動も変わってきた。今までは自分の事で精一杯で、周りに目を向けられず、トラブルが絶えなかったのだが、大根の様子の変化を教え合ったり、一緒に世話をしたりする様子が見られるようになり、生活全般が落ち着いてきた。毎日何度も、友だちを誘って大根を見に行くことで、人間関係も良くなってきた。気遣いができたり、優しい言葉が増えたりしたのも友だちもまた、自分と同じように「大切な命」だと感じられるようになっていたからだろう。

また、収穫の時には、どんな大根であってもそれを個性として喜び、大切に抱きかかえて家に持って帰る姿も親子手帳の成果だと感じた。

4　課題および今後の取り組みの方向

自分の育ててきた大根を、見守ってきた家族と食べることで親子手帳は終了となった。しかし、命のサイクルはここで終わるものではない。種を残し、次の命へとつないでいくことを見届けるのが大切だったと感じている。

学級園に３本大根を残していたので、次年度へ続いて大根の観察をすれば、薹が立ち、花が咲き、種ができる様子を見ることができたのだが、確認できないまま進級してしまったことを残念に思う。様々な予想を立てていたので、謎を残しながら観察をすればまた新たな発見に驚き、喜ぶことができただろう。結局教師側が答えを教える形に終わってしまったことや、児童が興味をもったり、疑問に感じたりしたことを十分に生かせなかったことが反省点である。次学年との連携を図り、命に対する尊厳の気持ちを継続して育んでいくことが課題である。